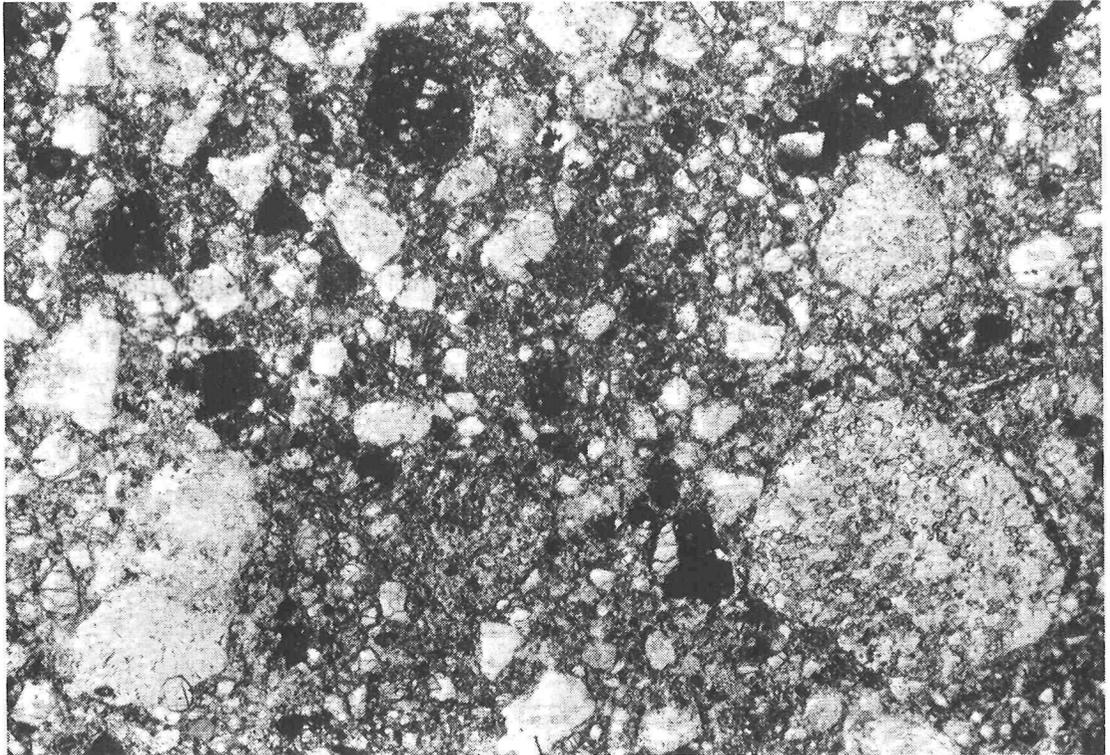


# 廣報

東京大学理学部



## 目次

表紙の説明	1
企画委員長の独りごと	藤田 宏 2
学際理学講座について	有馬 朗人 4
理学部LANシステムについて	国井 利泰 6
筑波の銀杏並木	野津 憲治 8
消防訓練	9
超高圧電子顕微鏡室の技術講習会に 参加してみませんか	立川 統 10
〈学部消息〉	10

## 表紙の説明

### 月 隕 石

月隕石は、月面への隕石の衝突によって月から掘り出され地球に落下したもので、南極大陸で発見されている。写真は、1982年日本南極観測隊によって、やまと山脈付近の裸氷上で発見回収された月隕石の岩石薄片の岩石顕微鏡写真である。写真の横巾は、3.3 mm。月高地の種々の岩石や鉱物、ガラス破片よりなる表土が熔結した角レキ岩である。岩石・鉱物学的特徴、MnとFeの量比、また酸素の同位体比等のアポロ計画で回収された月試料との類似性より、月高地に由来するもので、月高地、それも雨の海より遠く離れ、縁か裏側から隕石の衝突によって月の引力をふり切って飛び出し南極に落下したものである。現在までに、数十グラムのもものが5個、また1986年には数百グラムのもものが1個回収されている。

武 田 弘 (鉱物学教室)

## 企画委員長の独りごと

藤 田 宏 (数学教室)

本年の3月末に千葉大学へ急に移られた飯山教授の後任として理学部企画委員会(以下、単に企画委員会)の委員長をお引受けしてから数ヶ月が経った。その時点まで企画委員会の平のメンバーですらなかったことによる認識不足や、たまたま抱え込んだ“理学院構想”の重圧にとまどいながらの数ヶ月であったが、いまさら、企画委員長の抱負を語るには時が経ちすぎた。とって、今期の企画委員会の活動を回顧する時期に至っていない。そこで、企画委員長として一文を草して理学部の皆様に御挨拶するチャンスとして与えられた当記事の執筆であるが、就任以来の思いをとりとめないままに記させていただく。

企画委員会は学部長の諮問機関である(以下、理學部長、理学教授会などを単に学部長、教授会のように記す)。この場合の学部長の存在は、学部の自治のまとめ役である。すなわち、自治の原則にもとづいて学部の意志決定を支える教授会の主将が学部長であり、その手伝いをするのが企画委員会の任務であると私は考えている。具体的な作業は、学部長が教授会に諮る原案作りが主になる。この点では、教授会内に設けられた他の委員会、すなわち、会計委員会、人事委員会と同様である。ただし、企画委員だけは選挙によらず、学部長指名によって選ばれる慣行ができてしまっている。

さて、理学部は自然科学の研究教育を使命とする人達の集団としては同志的な統一を保っているが、活動の形態(研究対象、研究方法、教室のサイズと家風)では極めて多様である。また、教授会での直接民主主義が素朴な形では機能していく位の巨きさに達した学部である。この多様性と巨きさにも抱わらず、学部の意志決定が自治の名に

ふさわしい理解と民主的納得に基いて行われるためには、格別の努力が必要である。

以前から、わが理学部は学部長に人材を得ている。胆力・知略に秀でた有馬前学部長、明敏誠実な人格によって信望の厚い朽津現学部長はその好例である。しかし、どのように英明な学部長でも教授会との一体性を保つためには自他の努力と協力が必要である。評議員になってから眼のあたりにすることであるが、最近の学部長の職は大仕事である。責任の重さや職務の繁忙さもさることながら、学理・条理だけでは通じない世の中との対応、とくに、行政との折衝は誠に苦惱多きものと同情にたえない。大学事務局等を通じて即答を求められることの多い予算関係の折衝では、学部長が教授会の意向を糺す時間ももちろん、企画委員会で相談する機会すらないままに事を決まなくてはならない場合が再々起る。行政が東京大学の権威に畏敬していた佳き時代とは状況は全く違う。確かに、当今の学部長には荒海で船を操る船長のように“相談しているいとまがない”辛さがある。また、大学内の他部局、大学外の諸機関と微妙な交渉を行わねばならない問題が続出する最近の情勢では、当部局ではあり得ないが、「敵を斯くには味方よりす」は論外としても、「計りごとは密なるを以て貴しとす」といった兵法に従いたくなる部局長もおられるかもしれない。

しかし、状況がいくら厳しくても、我が理学部は軍隊でも会社でもない。自治の精神に則って自ら選んだ主将を支持する正直な学者の運命共同体である。学内外に対して理学部の主張が説得力を持つとすれば、その根拠は理学部の学問における実績および自治の名にふさわしい全学部的な合意にある。企画委員会の基本的役割りは教授会と学

部長との間に立って教授会の意向を掌握し、上記の民主的合意の形成の手伝いをするのである。もちろん、理学部は教授会メンバーだけで成り立っているわけではない。企画委員会で審議される案件の多くが職員・院生・学生に深く関わっていることも充分承知している。上に基本的役割りと述べたのは、教授会内に設置された企画委員会の責任の負い方を確認した趣旨のものである。

4月以来、関係者の協力をお願いして、概算要求の手順としては遅ればせの形になりながらも、中間子のセンターや天文台の施設について企画委員会でヒヤリングを行って勉強し、その結果を教授会に伝えることにより、これ等の要求（熱烈）支持を確固とする努力を行ったのも、企画委員会の役割りに対する上述の認識に基くものである。ちなみに昔は研究施設の新設に向けては、もっと念入りな議論が行われた。たとえば、情報科学科のはしりとなった情報科学研究施設の設置のときには、むしろ行政がそれを容認する雰囲気が出ていた当時の現状のもとでも、会計委員会（当時は施設新設の可否や順位も審議した）や総合計画委員会（企画委員会はこれにとって代ったものである）で厳しい検討が行われたし、教授会の議論は部門の内容にわたってホットであった。故高橋秀俊先生が学部内で懸命に説得に努められたことを思い出す。現在にくらべ、まだその当時は「理学部で決めれば実現する」という自信があり、それが真剣な議論につながっていた面もあるが。

研究施設の問題よりも格段に大きなスケールの問題として企画委員会が取り組んでいるのが、「理学院構想」である。具体的な案を作成する作業は、企画委員会に付属する小委員会「理学部大学院構想検討小委員会」（委員長田隅教授）が担当していることは理学部内では周知であろう。実の所、理学部（大学院の対応部分を含む）の身の振り方を決める大計画としての「理学院構想」は、今後の検討によって固めるべき流動的な部分が少くない。意図する方向は確然としているものの、いわば、構想から計画へ昇華しつつある段階である。

教授会でも度々確認されたことであるが、日本の自然科学の研究教育に対する使命感にもとづいて、「理学院構想」の実現の努力をするべきものと私個人も信じている。同じ目標が現制度内の運営の改善によって実現されるとの所論は、当事者の切実感からは遠いものであり、数十年に亘る現制度中での努力の敗北の歴史が与える反証に眼をつむるものであろう。

もとに戻って、「理学院構想」の内容は、まだ、固定化されていないのであり、内容についての前向きな忠告は我々の最も歓迎するところである。事板は、とてつもなく広く深刻である。それだけに、実現に向けてのストラテジーに小賢しい策略は無用であると考えている。忠告に耳を傾ける謙虚さと信義を重んずる誠実さによって説き続けられれば、学内外の理解が得られるものと信じたい。

さて、現状では「理学院構想」の実現は東大全体での「大学院重点大学構想」と無関係ではあり得ない。これらの理学院構想を取りまく環境の評価に関して、私は（数学的に？）単純明快な判定規準を持っている。「理学院構想の実現に役立つものは良く、それを妨げるものは悪い」である。これによると、理学院構想の実現に盡力してくれる大学執行部は良い大学執行部であり、理学構想の要求を認める行政官は良い行政官である。逆に、たとえば、「入学試験のやり方で言うことを聞かない東大の大学院構想などつぶしてしまえ」という地回り風の発想をする代議士（その存在がうわさされているが、もし存在すれば）は、悪い代議士である。

注 学内には別の単純明快な判定規準を持つ人達がいる。「臨教審路線に符号するものは悪い」という判定規準に従って理学院構想にも反対だとする人達である。当理学部の物理学科を私と同期に卒業した不破哲三氏が健在（病中でない）ならば、こちらの判定基準を時間的に先発した理学院構想に適用する妥当性を尋ねてみたいものである。

# 学際理学講座について

有馬 朗 人 (物理学教室)

一大学のみでは運営しきれない巨大施設を要する研究は、国立大学共同利用機関を利用せざるを得ない状況になりつつある。その最たるものが大加速器やロケットによる研究である。またそのような領域の教育には、共同利用機関の研究者に参画してもらう必要がある。特に大学院学生の教育は、後継者を養成し、新しく発展して行く分野に新しい人材を供給する上で重要である。そこで東京大学として、理学系研究科に学際理学講座を、工学系研究科に学際工学講座を置き、共同利用機関の研究者を併任することにした。なお、この制度は1987年4月に発足した。

学際理学講座には

宇宙科学研究所

高エネルギー天体物理学 I, II

宇宙プラズマ物理学 I, II

X線天体物理学

赤外線天体物理学

磁気圏プラズマ物理学

惑星大気物理学

太陽・地球系物理学

宇宙空間物理学

星間空間化学

固体宇宙物質科学

高エネルギー物理学研究所

加速器物理学

放射光化学

学術情報センター

学術情報学

学術情報管理学

学術情報データベース学

が置かれている。それぞれ教授 (または助教授) が1名助手が1名併任される。

この制度によって大学院学生が修士・博士両課程を通じて、それぞれの研究機関でその研究者を指導教官として、教育を受けられるようになったのである。この方式以外にも他研究教育機関に、大学院学生の研究指導を委託することが出来る。しかしその制度には1年乃至2年までの委託という制限がついている。従って本格的な指導は、学際講座制度によってはじめて可能になったと言ってよい。

教官の人事についてはあくまでも東京大学が主体性を持つが、運営を円滑に行うため人事に先立って研究所と相談する。また学際講座の教官として一たん併任されれば、大学教育については、東京大学の大学院教官と平等に、教育に参画することとなる。

## 学際講座が発足するまで

1981年東京大学宇宙航空研究所は改組され、一部を境界領域施設として工学部に附置したが、中心部分は宇宙科学研究所として独立した。そこでそれまで指導していた大学院学生の取扱いをどうするか、更にもっと本質的に東京大学として宇宙科学の研究教育を、今後どうするかが大きな問題になった。そこで先ず当面それまで大学院を担当していた宇科研の研究員を、東京大学に併任して大学院学生の研究教育にあたってもらうことにした。その期間は一応7年ということであった。分離前既に、修士課程に入っていた大学院学生が博士課程を終るまでに、7年あれば十分であろうという考えもあって、このような年限をとりあえずきめたのであった。しかし実際には、その後も新しい大学院学生の教育を宇科研の教官にゆだねて来た。

一昨年頃この併任制度の改廃について再考することになった。そこで東大に属する教官の間で併任について賛否両論があり、その調整にかなり時間がかかった。賛成論は、宇宙科学のような巨大科学は一大学でやれない、しかし学生にはその方面の研究をしたいものがある、そこで併任制度を活用したい、というのである。また研究所側から見ると学部や修士課程の教育は、様々な分野の研究者のいる場所で行う方がよいのである。この論に対して反論は2つあった。第1は、国立共同利用機関は何も宇宙科学研究所に限ったものではないから、併任をするなら他の共同利用機関も加えるべきである、というのである。第2は、このような併任をすることによって、東京大学自体の宇宙科学に関する研究教育体制の健全な発展がさまたげられるから、併任すべきではない、というのである。このような議論の結課、東京大学理学系研究科としては、宇宙科学研究所以外に、高エネルギー研究所にも参加を呼びかけ学際理学講座をつくることにした。後に昨年4月独立した学術情報センターもこの講座に参加することになったのである。

昨年東京大学は文部省に対して、学際理学講座の設置について予算要求を行ったが、はじめ文部省は宇宙科学研究所以外を含ませることに反対であった。その理由は多分、その当時より実現に向いつつあった、共同利用機関に置かれる総合研究大学院の計画に影響を与えては困らざらう。しかし文部省も学際講座の主旨をよく理解してくれて、本年4月よりこの講座が発足したのである。

しかし東京大学として要求した、学際講座に伴う研究費や研究室の増設などはまだ実現していない。これは併任教官と東京大学との協力をより密接にするため重要であり、今後の努力が必要である。

さて、この制度に伴って2、3浮彫りになった大学院制度上の問題点について述べておく。第1は、この制度に関する予算要求を、理学部が行っ

たことである。本来は理学系研究科が行うべきであったが、そこには習慣として予算請求権がない。しかし実際の講座が置かれたところは理学部ではなく、まさに理学系研究科であった。このように理学系へ設置された事実は、理学部固有の予算要求に競合しないようにすべきであるという、理学部教授会の希望を受けたものと考えられる。そこで人事はどこでやるかという第2の問題が生じたのである。とりあえず今回新設にあたっての人事は、予算要求の母体である理学部が行い、理学系研究科委員会でそれを認めるという形をとった。しかし今後の人事はどこがどうやるのか一つの大きな宿題である。実はこれに類する問題が、大学院設備充実費の予算要求の主体に関して発生している。この辺大学院の制度を急いで整備しなければならぬ。

さて明年度より東京大学東京天文台は独立し、国立共同利用研究所になる。私はこのような優れた研究所が次々東京大学から離れて行くことを、大変危惧している。独立すること以外に、研究費を増大し、必要な施設を得ることが出来ないであろうか。とも角今日まで東京大学の天文学研究教育の50%以上をになって来た天文台が独立したとき、その教育をどうして行くかは、理学部にとってのみならず、天文台、ひいては日本の天文学の将来にとって非常に心配なところである。理学部としても天文台としても、学際理学講座を拡大することによって対処しようとしている。しかしこの道は確定したとは言えない。更に今後同様な独立問題が他の研究所に万が一発生した場合には、学際理学講座で対応しようとしても、講座が大きくなり過ぎてしまうかも知れない。そこで別の方式を探る必要が生じるであろう。

学際講座を単に形式的なものでなく、真に大学院研究教育に有効なものにすることは、研究所教官と東大側の教官の密接な協力によってのみ可能になると信じる。

## 理学部LANシステムについて

國井利泰（情報科学教室）

現在理学部内部では、多数のコンピュータならびにコンピュータ端末を利用している。しかしながら、これらは単独で利用しているあるいは大型計算センターと接続して利用しているため、コンピュータ間でのリソース共有が困難で、メモリ等のリソースが不足したり、情報交換が必ずしも円滑に行われていない状況が発生してきている。近年では各分野の研究は、専門領域を掘り下げる面と同時に他分野との境界分野についても重視されてきており、円滑な情報交換への要求が高まっている。一方、米国の例を引くまでもなく、コンピュータは、今後益々利用が増大し、データの計算処理だけではなく、文書処理、情報管理、情報収集などの目的で、研究者一人当たり一台以上のワークステーションが利用されていく傾向にある。研究者誰もが個人で使えるコンピュータを持つことが必要となる時代が必ずやってくる。

このような状況を鑑みるに、これらの多数のコンピュータをネットワークに接続し、情報交換や共通リソースを活用できるようにすることが急務である。一台ずつ単独で使うのに比べ、すべてのワークステーションを相互に接続することにより、電子メール、電子掲示板、高性能な電子印刷システムの共同利用、データベース利用による境界分野の知識交換などのことができるようになる。さらにゲートウェイにより他のネットワークと接続することにより、さらに広域な情報交換ができるようになる。ワークステーションとネットワークが有機的に接続されていると、論文を海外の学会に投稿する時などの威力を発する。電話では時差が問題になるが電子メールでは時差は気にならない。原稿をファイルで送るので、受け取った方はそのままコンピュータ編集で短時間で印刷にま

で回すことができる。事実米国ではこのようにして教科書もつくられており、デスクトップ・パブリッシングとか電子出版とよばれている。

このようにネットワークによるメリットは大きく、ネットワークを整備の必要性が著しく高まっている。この必要性に基づき、理学部では理学部内に多数のワークステーションを配置して、それらを相互に接続するローカルエリアネットワークシステムを構築することが今後の理学部の研究を進めるにあたって重要であるということを確認し、教授会内に理学部LAN（Local Area Network：ローカルエリアネットワーク）小委員会を設置することとした。そして委員会では、現状の調査、要求のまとめを行い、理学部LAN要求仕様書を作成した。

理学部LANはつぎのような機能を提供する。

- ① 東京大学大型計算機センターとの接続：複数の接続方式が適応でき、従来の個別接続よりも自由度を高くすることおよび高速な接続が可能となる。
- ② 許可されたコンピュータとの接続：例えばプロッタ、高速プリンタ、高品質プリンタなど、分散している教室内・教室以外のコンピュータリソースの有効利用が可能となる。
- ③ 電子メール、情報交換サービス：利用者は、常に電子メールシステムをアクセスすることができ、自分宛の手紙を見たり、特定の相手あるいは、複数の人に対して、手紙を出すことができる。また、電子掲示板システム（不特定者宛の掲示。興味のある人が自由に読むことができる）、電子会議（特定の話題について意見を交換しあう）などのサービスも可能となる。
- ④ 共通ユーティリティサービス：データベース、

高品質印刷など高性能なサービスを共通に利用できる。

- ⑤ 国際ネットワーク，他ネットワークとの接続：国際学術ネットワークや，他学部，他大学，研究機関との接続が自由にでき，国際的な情報交換が円滑に，効率よく行える。
- ⑥ 学科内オフィスオートメーション：学科内のOAを推進でき，業務の効率化とサービスバリエーションの向上が可能となる。

また，現在本理学部情報科学科で研究開発を行っているTRONアーキテクチャにもとづく人間に使いやすいワークステーションもネットワーク端末として導入する計画となっており，コンピュータを専門としない研究者にも導入を効率よく行える。

現在，理学部内では，各種のターミナル，コンピュータが利用されており，ネットワークとしては異機種間接続ネットワークが要求される。また，大型計算機センターを含む各館の間を高速な基幹ネットワークで結び，基幹ネットワークに館内あるいは，教室単位でのサブネットワークを張るという方針を取る。サブネットワークは，館内あるいは教室での要求に応じて適当なものを選ぶことができるようにし，柔軟な対応ができるようにする。基幹ネットワークは，大容量で高速であることが要求される他，館と館との距離が長い所では1km近くに達するため，ノイズ，速度，大地の電位差の点から伝送路としては光ファイバーが適当

である。容量については，以下の程度を考えており，合計容量は約320 Mbps程度である。

MAX 19.2 Kbps	
全二重調歩同期回線	500 回線
MAX 64Kbps 同期回線	20 回線
10Mbps パケット(Ethernet)回線	10 回線
音声(64kbpsデジタル)	50 回線
テレビ会議映像(384 kbps ~ 1.5 Mbps)	5 回線
映像(30~100 Mbps)	2 回線

各館には，以上の回線とサブネットワークとを接続し，基幹ネットワークの障害診断の機能を持つノードプロセッサを設置する。また，外部のネットワークと接続するゲートウェイプロセッサを用意する。電子メールサービスは，ノードプロセッサに分担させるか，集中型として用意する。

共通ユーティリティサービス機能を提供するために，ノードプロセッサあるいは，サブネットワークにユーティリティサーバーを接続する。LANの端子は，各部屋の壁或いは床にコンセントの形でとりつけ，容易に着脱できるようにする。

以上理学部LANを概説したが，現在実際の導入計画が進行中である。1990年代の理学部の研究活動を円滑に推進するには，今後相当時間のかかる研究・教育に必要な応用ソフトウェア開発スケジュール上も，現時点で理学部LAN要求仕様書に基づくネットワークを構築しておくことが緊急かつ重要である。

## 筑波の銀杏並木

野津 憲 治（地殻化学実験施設）

紅葉の季節になると、多くの大学では構内の並木が色づき、その風情は大学ごとに独特な味わいをもっている。本郷キャンパスの銀杏並木は東大の代名詞になっており、落葉の銀杏並木は周囲の古い建物と調和して絵になる光景を作っている。私が昨年まで勤めていた筑波大学も、紅葉の美しさは東大に勝るとも劣らない。筑波は空気が冷めたく澄んでいるためか、赤や黄色の鮮やかな色彩がとくに印象深い。

私が筑波大学へ勤め始めた昭和51年は、筑波研究学園都市の建設の初期の頃にあたり、現在の完成された姿しか知らない人には想像を絶する環境であった。幹線道路ですら建設中で未舗装の所が多く、乾けば埃がひどく、雨が降れば泥でぬかるんだ。「ゴム長靴を履いて泥道を通った」と、その当時から住んでいた人たち同士の間で懐しんで語られる頃である。筑波大学では広いキャンパスの中に建物が次々と建てられ、学内のループ道路や歩道の脇に多くの街路樹が植えられた。そして、学内道路は植えられた樹の名前をとって「かえで通り」とか「すずかけ通り」とか名づけられた。細長いキャンパスの中央部近くに、小さな銀杏並木も作られた。しかし、植えられてから何年かは、紅葉の季節になっても、並木とまわりの環境とがそぐわず、何かとってつけた感じがして落ちつかなかった様な気がする。その頃の大学は、まさに建設の途上で、教育、研究、学内運営にわたって試行錯誤が続き、至る所で熱気に溢れていた。私自身は、質量分析装置など新しく設置された何種類かの分析装置を用いて、火山岩の起源の研究に没頭していた。

はっきりといつだったかは憶えていないが、何年か経ったある年、晩秋の厳しい冷え込みの翌朝にいつもの様にループ道路を通ると、紅葉の色彩がとても鮮やかで、周りの景色に溶け込んでいることに気づき、大いに感激した。遠くに筑波山を望み、大学の真新しい高層建築と色づいた街路樹とが実によく調和がとれているのである。その頃の大学はと言えば、創設期の熱気もさめ、ある種の落ちつきが現われてきていた。その後も並木は年々生長をつづけ、今や大人の風格をそなえつつある。

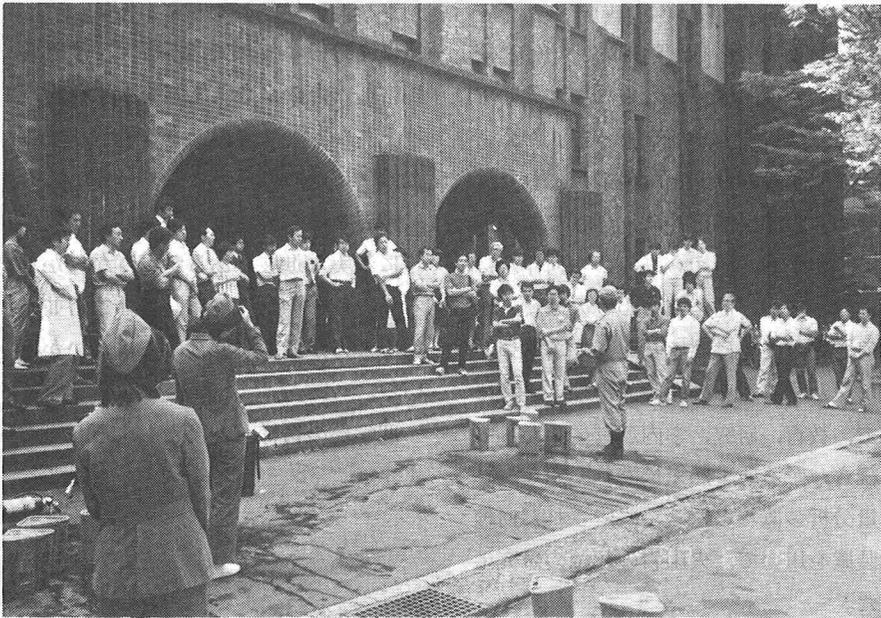
私は、筑波大学から理学部附属の地殻化学実験施設へ移った。この施設は昭和63年度で10周年を迎える。また、この施設が中心になって研究が行なわれてきた地震化学の分野が内外に認められるようになってから10数年位である。この分野が名乗りをあげ施設ができた当初は、周囲に対して熱気は充分伝わったであろうが、周囲から「筑波の銀杏並木」のような感じをもたれていたに違いない。しかし今やそのような時代はすぎ、一歩進んだ段階に踏み入ろうとしている。この分野がさらに発展するためには、創設期が一段落した次の10年に着実な進展があるかどうかにかかっているだろう。その中から、新たな「銀杏並木」を作っていくことが最も必要なのではないかと私は思っている。

理学部の皆様、今後ともよろしく願いたします。

## 消 防 訓 練

さる6月16日、理学部2号館で、消防訓練が行なわれました。写真は、その時のものです。(写真

提供は、動物学教室の井尻先生です。)



## 超高压電子顕微鏡室の技術講習会に参加してみませんか！

工学部附属総合試験所の超高压電子顕微鏡室では、電子顕微鏡は初めてという人やいは電子顕微鏡技術の向上を目指している人のために、電子顕微鏡利用者講習会を開催しています。当面は学内の教職員を対象として、電子顕微鏡本体の操作法のための講習会とのことです。

また本学の共同利用施設である超高压電子顕微鏡は、高い透過能と性能の大幅な向上による高分解能観察で、より実証的な研究手段として

の役割りを果たしています。この際、これまで電子顕微鏡での研究を行なったことのない人も、超高压電子顕微鏡による研究を進めてはいかがですか。

講習会および電子顕微鏡についてのご相談は、工学部附属総合試験所超高压電子顕微鏡室西澤さん（内線7741）へお問い合わせください。

超高压電子顕微鏡室実行委員  
立川 統（鉱物学教室）

## ＜学部消息＞

### 教授会メモ

#### 62年6月17日（水）定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題
- (1) 前回議事録承認
  - (2) 人事異動等報告
  - (3) 昭和62年度免許教科に関する認定科目表について
  - (4) 人事委員会報告
  - (5) 会計委員会報告
  - (6) 企画委員会報告
  - (7) 教養学部連絡委員会報告
  - (8) 新キャンパス委員会報告
  - (9) その他

#### 62年7月15日（水）定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題
- (1) 前回議事録承認
  - (2) 人事異動等報告
  - (3) 奨学寄附金の受入れについて
  - (4) 物品寄附の受入れについて
  - (5) 附属植物園利用規則の一部改正について
  - (6) 人事委員会報告
  - (7) 会計委員会報告
  - (8) 企画委員会報告
  - (9) 新キャンパス委員会報告
  - (10) その他

# 人 事 異 動

## (講師以上)

所属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
学際理学 客員講座	助 教 授	小 山 孝一郎	62. 5. 21	併 任	63. 3. 31 まで
"	"	鶴 田 浩一郎	62. 5. 21	"	"
人 類	教 授	埴 原 和 郎	62. 6. 1	配 置 換	国際日本文化研究センターへ
"	"	埴 原 和 郎	62. 6. 1	併 任	本務：国際日本文化研究センター 任期：62. 9. 30 まで
化 学	"	奈良坂 紘 一	62. 6. 1	昇 任	
"	"	岩 村 秀	62. 6. 1	配 置 換	岡崎国立共同研究機構より
植 物 園	講 師	矢 原 徹 一	62. 6. 1	昇 任	
情 報	助 教 授	坂 村 健	62. 7. 1	昇 任	講師より
物 理	"	永 宮 正 治	62. 7. 6	休 職	63. 3. 31 まで

## (助 手)

学際理学 客員講座	助 手	松 崎 章 好	62. 5. 21	併 任	63. 3. 31 まで
"	"	小 原 隆 博	62. 5. 21	"	"
"	"	早 川 基	62. 5. 21	"	"
"	"	柳 沢 正 久	62. 5. 21	"	"
素 粒 子	"	永 江 知 文	62. 6. 1	昇 任	物理学科技官から
"	"	永 江 知 文	62. 6. 16	配 置 換	核研へ
物 理	"	三 明 康 郎	62. 6. 1	休職更新	62. 2. 15 まで
化 学	"	林 秀 則	62. 6. 1	休 職	62. 10. 30 まで
鉦 物	"	山 中 高 光	62. 7. 1	昇 任	阪大教養部へ
物 理	"	豊 島 近	62. 7. 1	休職更新	63. 6. 30 まで
植 物	"	黒 澤 幸 子	62. 7. 1	昇 任	教務職員より
化 学	"	増 田 昭 三	62. 7. 1	"	分光化学教務職員より

## (職 員)

地 物	事 務 官	塩 谷 祥 子	62. 6. 1	配 置 換	工学部より
-----	-------	---------	----------	-------	-------

## 外国人客員研究員

所属	受入れ教官	国	籍	氏名	現職	研究期間	備考
数 学	伊原 教授	アメリ	カ合衆国	GROSS BENEDICT HYMAN	ハーヴァード 大学教授	62. 6. 6 ~ 62. 7. 4	
地 理	阪口 教授	日	本	大 村 纂	スイス連邦工 科大学教授	62. 7. 16 ~ 63. 1. 15	
数 学	服部 教授	連 合	王 国	WALL T.C. CHARLES	リヴァプール 大学教授	62. 9. 15 ~ 62. 11. 18	

## 理学博士の学位取得者

〔昭和62年5月25日付（5名）〕

専門課程	氏名	論文題目
地球物理学	吉田 真 吾	地震波形のインバージョンによる震源過程の研究
論文博士	藤田 茂	短周期地磁気脈動の上部電離層における伝播特性
論文博士	小倉 尚 志	共鳴ラマン分光法によるチトクロム酸化酵素の研究
論文博士	大 路 樹 生	日本産ゴカクウミユリ科 (Isocrinidae) の自然史
相 関 理 化 学	西 澤 克 志	衝突によるCARSスペクトルの狭帯域化の研究

〔昭和62年6月22日付（4名）〕

論文博士	北 川 博 之	ネステドテーブルデータモデルによる構造的フォーム操作の研究
論文博士	金 森 英 人	動的赤外半導体レーザー分光法による光化学素反応過程の研究
論文博士	馬 場 浩 司	超音速自由噴流中における沃素分子の低エネルギー衝突による振動回転緩和の研究
論文博士	口 蔵 幸 雄	マレー半島の狩猟採集民Semaq Beriにおける生計活動の生態学的研究

〔昭和62年7月20日付（6名）〕

物 理 学	佐々木 茂 樹	原子核反応における $\Delta$ 生成の測定とカスケード計算による解析
地球物理学	青 木 繁 明	成層海洋中における海底地形に入射したロスビー波の透過
地球物理学	佐々木 晶	集積する地球をとりまく原始水素・ヘリウム大気の構造と進化及び地球希ガスの起源
論文博士	山 崎 昌 男	直積型擬微分作用素の種々の有異性

専門課程	氏名	論文題目
論文博士	石野修一	Corynebacterium glutamicum のリジン生合成経路に関する研究
論文博士	為ヶ井強	K <sub>0.30</sub> MoO <sub>3</sub> の電荷密度波の伝導と構造

## 海外渡航者

(6ヶ月以上)

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
動物助手		石井直方	連合王国	62. 4. 18 ~ 63. 2. 18	単離平滑筋細胞の収縮機構に関する研究のため
素粒子助手		真下哲郎	スイス	62. 6. 20 ~ 63. 3. 31	国際共同実験電子・陽電子衝突実験のため
素粒子助手		竹下徹	スイス	62. 7. 1 ~ 63. 3. 31	同上
地殻助手		平田直	アメリカ合衆国 カナダ	62. 7. 6 ~ 63. 7. 6	地震学に関する調査・研究及び「第19回国際測地学・地球物理学連合総会」出席のため

### 昭和62年度科学研究費補助金理学部申請・採択件数一覧表(追加分)

昭62. 8. 5現在

研究種目	申請件数	採 択 件 数			採 択 率
		新 規	継 続	計	
特別推進研究(1)	2		2	2	100 %
特別推進研究(2)	3		3	3	100 %
特 定 研 究(1)	1		1	1	100 %

### 昭和62年度海外学術研究理学部申請・採択件数一覧表

昭62. 8. 5現在

研究種目	申請件数	採 択 件 数			採 択 率
		新 規	継 続	計	
総 括	2		2	2	100 %
学 術 研 究	9	6		6	66.6 %
大 学 間 協 力	2	2		2	100 %

## 理学部長と理職の交渉

理学部長と理学部職員組合との交渉はこの間昭和62年5月25日、6月22日、7月20日に行なわれた。その主な内容は以下のとおりである。

### 1. 専門行政職俸給表適用問題について

国立大学協会は6月16日の総会で当面の打開策としてC案、つまり「専門行政職を導入することを目指しつつ、それに向かっての中間的段階として、まず現行の行政職俸給表体系のなかで職務内容等諸条件の整備を行い、官職および組織を整えて処遇面での改善を図る」ことが現実的であるという報告を了承した。これと並行して、理学部では昭和62年度の企画委員会で改めて組織化案を検討することにし、技官問題検討小委員会（宮沢委員長）では、各教室・施設の実態を聴取のうえ、本年9月中を目標に案を取りまとめる方針を決めた。

理職では、技官を専門職として法的に明確にし待遇改善につなげること、組織化にはスタッフ制を基本とし部課長制をとらないこと、理学部の組織案作り発言できる場を設けること、の諸点を要求した。宮沢委員長は、遅くとも企画委員会に案を計る前に意見交換することを約束した。

### 2. 大学院改革について

東大当局は、5月26日の大学院問題懇談会の中間答申を受け、6月9日の評議会で東京大学を大学院に重点をおく大学に改革する調査・研究のための63年度概算要求をすることを決定した。理学部ではこの大学全体の構想に沿って理学院(仮称)構想の検討を進めつつある。

理職では、具体的プランのない段階での時期尚早な概算要求決定に賛成しないこと、情報は早急に公開し広く全構成員から意見を求めること、理学院の中間試案に書かれていない事務系・技術系の業務のありかたと職員の待遇についての構想を示すことを要求した。

これに対し学部長は、今が改革の好機であり、理学部は以前から大学院改革に真剣に取り組んでおり、今回の構想もその延長線上にあるものであるとの見解を示した。また7月14日には理学部の全教職員を対象にした説明会が開かれ、改革の理念と現在の試案について説明と意見交換が行なわれた。さらに交渉においては今後も同様の場を設けることが確認された。事務系、技術系などの問題については、重要な課題であるという認識をもっており、現在検討中であると回答した。

### 3. 昇格について

理職の要求していた昇格のうち、この間、事務職員の4級昇格などその一部が実現したが、昇格基準の悪化などに伴い図書職を中心に極めて不満足な結果であるので、引きつづき努力するよう要望した。学部長は、状況を理解し、今年度暫定定数の獲得も含め、努力を約束した。

### 4. 教務職員問題について

この間、理学部では2名の教務職員が助手に昇任したが、理学部の教務職員は東大全体と比較しても、なお極めて悪い給与条件に置かれているため、理職として早急な改善を求めた。学部長は、学部長会議で話題になったことなどをあげ、重大な問題としての理解を示し、努力する旨を表明した。

### 5. その他

定員外職員の定員化、行(二)職員の行(一)振りかえが継続的に取りあげられ、学部長は努力を約束した。また、大学審議会法案、天文台の一部部門が理学部に移管された場合の技官の待遇などについても議論された。

## 理学部と理学部大学院学生・学部学生との懇談会

企画委員会委員長藤田宏教授と学部学生自治会の主催で、標記の会合が7月4日（土）午後1時30分から約2時間30分間にわたって4号館1220号室で行われた。話題は理学院構想で、学部側出席者は藤田教授、朽津学部長、田隅教授（大学院構

想検討小委員会委員長）の3名、学生側出席者は大学院学生、学部学生を合わせ50名弱であった。藤田教授による理学院構想に関する一般的説明のあと、質疑応答が行われた。

## 大学院（理学院構想）に関する説明会

企画委員会委員長藤田宏教授の主催で、教職員を対象とする標記の会合が7月14日（火）午後5時30分から約2時間30分にわたって1号館150号室で行われた。説明者側出席者は藤田教授、朽津学部長、宮沢辰雄教授（評議員）、田隅教授（大学院構想検討小委員会委員長）で、有馬総長特別

補佐も出席された（途中退席）。藤田教授による会合の趣旨説明のあと、田隅教授による3月18日付中間試案に関する説明があり、これに関する質疑応答が行われた。また、有馬総長特別補佐による全学の動きに関する説明があった。出席者は約50名であった。

---

### 編集

田賀井 篤 平（鉱物）	内線	4544
高 橋 正 征（植物）		4474
佐 藤 勝 彦（物理）		4207
横 山 茂 之（生化）		4393
佐佐木 行 美（化学）		4359